

シベリヤ物語

総天然色映画（カラー）を初めて見たのは、私が電波高校時代、榴ヶ岡公園劇場（映画館）であった。公園館の愛称で親しまれていた。テレビはまだ無く、娯楽は映画が一番だった。

魚屋と仕出しを経営している叔父さんの家に下宿して学校に通った。二階の八畳に年頃の娘四人と私が寝起きしていた。女四人は頭を揃え一列に蒲団を敷き、私は直角に蒲団を敷く、私の寢床の上。五Mは押入である。ウツカリ立ち上がれば、ゴツンと頭を打つ。寝そべって電気スタンドの明かりで勉強した。娘達は関係無く寝ていたようだ。長女、次女、三女、四女、よく叔父、叔母は平気で居たものだ、長女の常ちゃんは今学中に嫁に行った。嫁入り道具を運ぶのを手伝ったのを思い出す。

公園館まで徒歩十五分位、よく見に行った。その時見たロシア映画のシベリヤ物語は、総天然色の音楽映画で、シベリヤ大自然の中で音楽家をめざす若い男女の恋物語である。壮大な大自然、素晴らしい音楽、カラーの風景といい、映画館割れんばかりの大音響だった。

私の記憶の底にあつて忘れ得ない映画は二つ「シベリヤ物語」と「望郷の歌」だ。どちらも若かりし頃の感受性の強い時代だ。感激してはすぐ涙を流す性格だったよ

うだ。

私の雅号（ペンネーム）の「恵涙」はその時代に称したものだ。

勝叔父は母きよしの弟で、魚屋と仕出しを行っている、菊田安兵衛の一人娘（いつ）に婿養子になった人で、背が高くがっちりした人だった。叔母も体の大きい人で優しかった。

叔父は大の酒好きで、毎日濁酒（どぶろく）一升を飲む。子供達は夕方になると、一升びんをぶら下げ、近くの朝鮮部落に買いに行く。たまに出掛け先で飲み過ぎ、道路端で酔いつぶれ、寝込んでしまう。叔母に頼まれ大八車で迎いに行く、体が大きく重いので、グーグー寝ている叔父を車に乗せられない。通りがかりの人に手伝って貰い、やっとこ帰り着く。乗せたまま道端に置いておく、酔いが醒めたのち一人で起きて家に入り寝床に入る。こんな事がお世話になっていろいろうち何回かあった。

迎いに行く場所は公園館の近くが多かった。誰かが知らせてくれる。シベリヤ物語を思いだすとき、酔っぱらった叔父や、優しかった叔母、一人娘に孫八人ならず九人の従兄弟を思い出し、あの当時を偲び感慨に耽る。